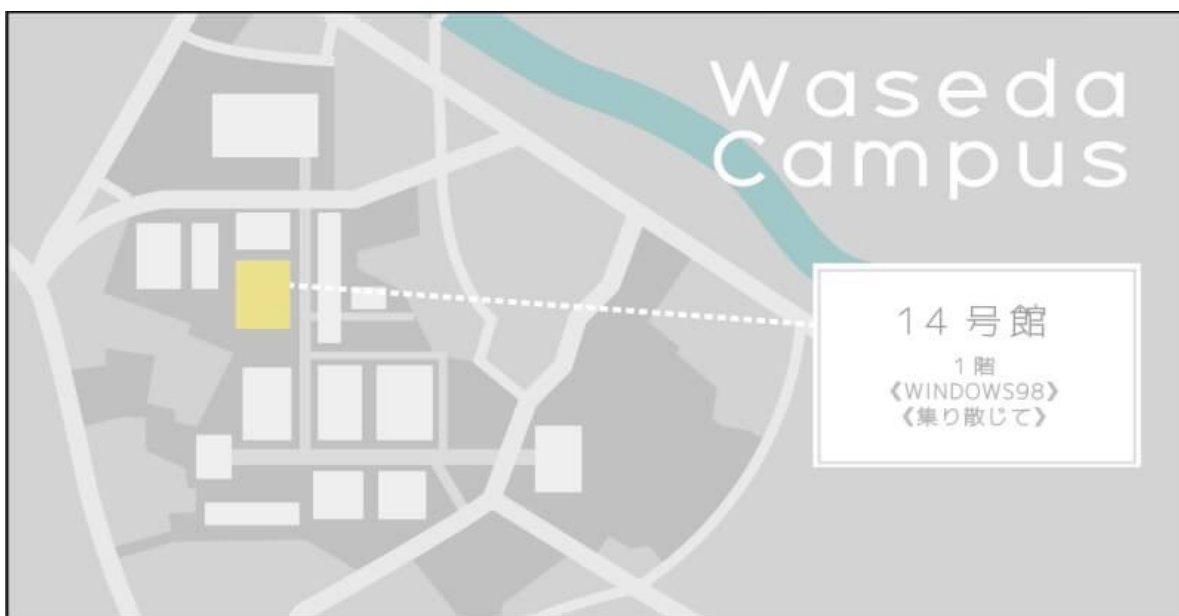


## 14号館



### ① 《WINDOWS 98》



撮影者：谷所はつき

製作者：川上喜三郎

素材：金属

場所：14号館1階

早稲田大学工学部建築学科を卒業した建築家兼彫刻家、川上喜三郎の作品。様々な方向に向けられた金属板は、多様なヴァリエーションを示し、その集積が共同体のダイナミ

ックなリズムを作り出すことで「不連続統一体」という概念を呈している。この「不連続統一体」は彼の敬愛する恩師、元早稲田大学理工学部学部長である建築家、吉阪隆正（1917-1980年）が唱えた共同体のあるべき姿を表している。川上はこの作品によって師の思いを伝えているのである。

「WINDOWS」と名づけられた彼の作品はもうひとつ存在する。丸の内ビルディングの壁面に設置されているものである。この作品も大きな窓のすぐ傍に位置し、光、風といった自然の作用と金属板との関係性が非常に興味深い作品である。川上氏の作品には、人工と自然の関わり合いが見て取れると考える。

執筆者：谷所はつき

## ②《集り散じて》創立 125 周年記念絵画

製作者：藪野健

製作年：2000 年

サイズ：259×194cm

素材：油彩・キャンバス

場所：14 号館 1 階

早稲田大学創立 125 周年を記念して制作された作品。藪野らしいブルーが印象的な空に瞬く星は、大熊座とカシオペア座である。これらの星座は創立者大隈重信と早稲田のイニシャル（W）を意識したものだという。俯瞰する視点で描かれた早稲田キャンパスには建築家の配慮が行き届いた校舎と賑やかな学生の姿が描き込まれている。タイトル《集り散じて》は早稲田大学校歌の一節であり、時代の移ろいと共に建物や学生が変わりゆくキャンパスの様子を表している。この言葉を題としたのは、学生として校友として、また教授として早稲田と関わり続ける藪野ならではのであろう。大隈講堂を背に歩いていくと、博物館や各学部の建物が立ち並び、自ずと学問の世界へ誘われる。早稲田大学は時代や地域をまたぎ、多くの人々との関わりの中で発展してきた。そのような早稲田の歴史が藪野の愛校心によって集約されたのがこの絵であるといえる。

執筆者：小菅桃子

参考資料：

早稲田建築アーカイブス「川上喜三郎 | WAA | WASEDA ARCHITECTURE ARCHIVES」

〈<http://waarchives.org/person/029/>〉、2018 年 1 月 22 日最終閲覧

早稲田ウィークリー「ブラウセダ～夫婦で思い出の早稲田を歩く～〈前編〉」

〈<https://www.waseda.jp/inst/weekly/features/specialissue-burawaseda1/>〉、2018 年 1 月

22 日最終閲覧